

肉筆浮世絵と江戸のファッション 町人女性の美意識

Townswomen Fashion: Kosode and Ukiyo-e Paintings in Edo Period

2009年10月3日(土)~11月23日(月・祝)

前期:2009年10月3日(土)~10月25日(日)

後期:2009年10月27日(火)~11月23日(月・祝)



しろちりめんじかきかえでもようこそで
《白縮緬地垣楓模様小袖》
国立歴史民俗博物館、前期



無款 《寛文美人図》 部分
紙本著色 一幅 65.7 x 29.2 cm
大谷コレクション、後期

【本件に関するお問い合わせ】

ニューオータニ美術館

〒102-8578 東京都千代田区紀尾井町4-1 ニューオータニガーデンコート6F

TEL 03-3221-4111 ・ FAX 03-3221-2988

<http://www.newotani.co.jp/museum>

ニューオータニ美術館（千代田区紀尾井町4-1 館長 大谷和彦）では、2009年10月3日（土）より11月23日（月・祝）まで「肉筆浮世絵と江戸のファッションー町人女性の美意識」展を開催いたします。

浮世絵は、江戸の庶民層が生み出した美術のひとつです。幕末までのおよそ200年の間、「浮世」、すなわちこの世の享樂的な世相を反映して移り変わる町方の風俗を、その時々々に克明に描き出しました。ことに女性を主題とした美人画は、その容ぼうのみならず、服飾描写までもが丹念になされています。彼女らが身にまとう小袖の模様や質感は、現存する同時代の染織作品と比較しても、そんな色ないほどの再現性をもって描き分けられており、絵師が、町人女性のファッションを熱心に観察、描写していたことが分かります。

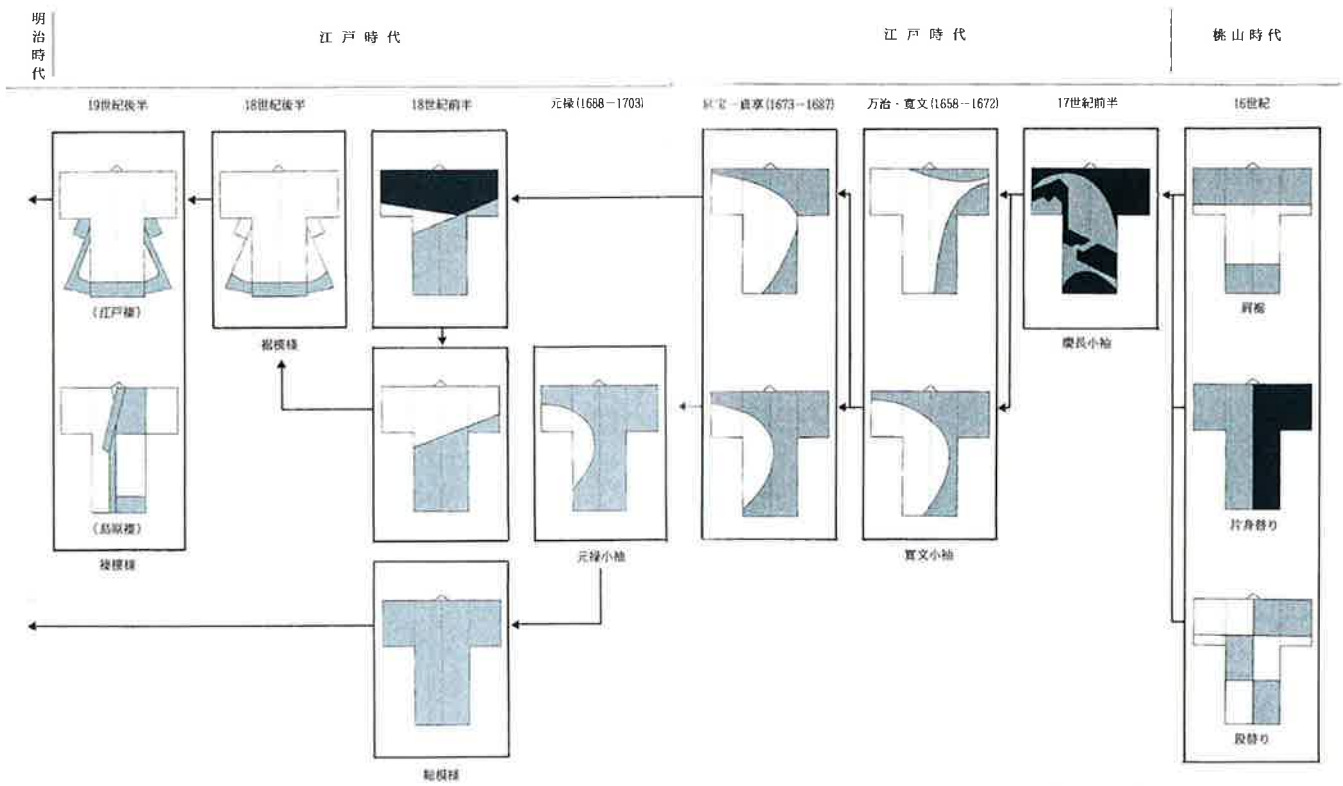
本展では、江戸時代初期から幕末までの肉筆浮世絵の美人画と、現存する江戸時代各時期の小袖や小袖模様の見本帳である雛形本を含む前後期約60点により、江戸ファッションの変遷を展覧いたします。江戸に花開いた町人文化の粋をお楽しみください。

【展覧会概要】

- 1) 展覧会名 : 肉筆浮世絵と江戸のファッションー町人女性の美意識
- 2) 会 期 : 2009年10月3日（土）～11月23日（月・祝）
前期 2009年10月3日（土）～10月25日（日） 20日間
後期 2009年10月27日（火）～11月23日（月・祝） 25日間
*前後期で大幅な展示替えを行います
- 3) 主 催 : ニューオータニ美術館
- 4) 監 修 : 長崎巖氏（共立女子大学教授）
- 5) 開館時間 : 10:00～18:00（入館は17:30まで）
- 6) 休 館 日 : 月曜日（ただし10/12、11/23は開館）、10/13
- 7) 入 館 料 : 一般¥800、高大生¥500、小中生¥300、宿泊者無料、
20名以上の団体は各¥100割引、着物で来館のお客様は半額
- 8) 関連事業 : ① 講演会
江戸町人女性のファッション～華やかさから「粋」へ
講 師：長崎巖氏（共立女子大学教授、本展監修者）
日 時：10月25日（日）14:00～15:30
会 場：アリエスの間（ホテルニューオータニガーデンコート5F）
聴講料：¥500 要電話予約 03-3221-4115（先着順）
② ギャラリートーク
10月17日（土）、11月7日（土）の14:00～ 当館学芸員
- 10) 連 絡 先 : 〒102-8578 東京都千代田区紀尾井町4-1
TEL : 03-3221-4111 FAX : 03-3221-2988
E-mail : museum@newotani.co.jp

展覧会構成

〔参考〕小袖の模様配置の変遷



長崎巖『日本の美術 435 小袖からきものへ』（至文堂） p 88～89

17 世紀前半

江戸時代初期寛永（1624～44）の頃までは、桃山時代までの形態的な特徴を引き継いだ小袖が広く用いられていました。それは、着用の際、胴回りがゆったりしながらも襟元がほぼ隙間なく締まり、袖口からはひじ近くまで腕が出るというものでした。しかし、模様は、この頃になると桃山頃までの左右対称を基本とした規則的で安定感のある構成から、モチーフの配置に片寄りの見られる動的な構成に変化していきました。大谷コレクションやサントリー美術館の《舞踊図》などには、その様子をうかがうことができます。



無款《舞踊図》部分・重要美術品
紙本著色 六面 各 63.0 x 37.1 cm
サントリー美術館、前期



無款《舞踊図》部分・重要美術品
紙本著色 六曲一隻
各扇 73.0 x 39.4 cm(ただし図は4図)
大谷コレクション、後期

寛文期

寛文期（1661～73）を中心に隆盛した「寛文小袖」は、桃山時代までのきもの影響を脱した江戸時代最初の流行意匠と位置づけられます。その模様配置は、一層動的になり、インパクトの強いモチーフを広い空間にゆったりと、左右非対称に配置するものです。ほどこされた模様は、動植物ばかりか器物や文字など多彩かつ機知に富んでおり、伸張する時代にふさわしいのびやかな表現を見てとることができます。



無款《花持美人図》部分
紙本著色 一幅
84.7 x 26.6 cm
出光美術館、前期



きりんずじゆきわたけもようこそで
《黄綸子地雪輪竹模様小袖》
国立歴史民俗博物館、前期



寛文7年刊
『御ひいなかた』より

元禄期

元禄期（1688～1703）に入ると、「寛文小袖」では余白であった部分にまで模様を配した華やかな意匠が流行します。その最たる特徴は、背面の左腰周辺にわずかな余白を残して橘、梅、桜、松などの立木や草花などを配していることです。武家女性の小袖にあっては絞り染めや刺繍、摺り匹田といった伝統的な技法が用いられ、町人女性の小袖においては新たな技法である友禅染が採用されました。



菱川友房 《月夜弾琴図》部分
絹本著色 一幅 36.5 x 51.5 cm
大谷コレクション、後期



くろあさじりゅうすいつばきもようかたびら
《黒麻地流水椿模様帷子》
個人、後期

18世紀前半から半ば

女性の帯は、17～18世紀にかけて次第に幅が広がっていきます。一説によれば（生川春明著『近世女風俗考』、寛文末（1661～73）に2寸5分から3寸（7.5～9cm）だったものが延宝・天和（1673～84）には5～6寸（15～18cm）、正徳・享保（1711～36）には8～9寸（24～27cm）に広がったといえます。その変化が小袖の意匠にも影響を及ぼしました。幅広の帯によって小袖が上下に分断されることから、それをきっかけに、上下で小袖の色を染め分けたり、異なる模様を配するようになります。やがては、上半身の模様を取り去り、腰から下のみに意匠をほどこす「腰模様」が生まれました。



宮川長春《小むらさき図》部分
絹本著色 一幅 89.0 x 39.0 cm
大谷コレクション、後期



そめわけりんずじひおうぎてっせんもようこそで
《染分縮子地檜扇鉄線模様小袖》
国立歴史民俗博物館、後期



山崎龍女《美人図》部分
紙本著色 一幅 30.6 x 50.8 cm
大谷コレクション、前期



そめわけちりめんじちちばなつるびしもようふりそで
《染分縮緬地橘鶴菱模様振袖》
個人、後期